Ⅱ　地下水の流れを阻むもの――秩父事件の現代的意味――森山軍治郎

一、近代日本と北海道

一　「軍治郎」という名前

森山です。次から次と似たような顔ぶれが出て来て、三番目に出て来た僕も何か学生みたいなんですけど。

昨日おいでになった方はすでに御覧のとおり、普段は僕はいつでもジャンパーを着て、ジーパンをはいて、授業するときも全部そういう恰好でしてます。今日はなぜこんな恰好（紺のスーツにブルーのワイシャツ・ネクタイ姿）でしたかというと、ひとつはこの服を持って来たからです（笑）。本当は昨日のようにしようと思ってたんですが、先程、僕は京都に親戚があるもんですから、京都の親戚に電話しましたら、親戚の娘さんが、あのう僕はちょっと十年前に会った切りで分らないんですけれども、来られるというので、親戚一同から北海道に行った森山というのは、あれは非常にひどいやつだと、あんな無様な恰好で京都へ現われやがってとなりますと、またちょっと困りますの

で、あんまり困らないんですけども、まあ、そういうこともあって着たわけです。普段は本当にいつもこんな恰好じゃないんです。まあこれも今日の話の内容と関わるんですけど、つまりよそ行きの心と普段着の心と、この問題にも関わってきますので単に着る物の問題ではないのであります。問題は中身ですから、着る物がよそ行きか普段着かというようなことではないので、そういう意味でもこれを着て来たわけです。

で、名前が森山軍治郎というもんですから、軍治郎というもんですから、どうも名前だけを見た人は、これは相当古い人ではないかと、だいぶ歳もですね五十か六十ぐらいではないかと、たいてい僕が何かを書いて実際に僕が現われるまではですね、五十か六十の人を想像していたと、それが何か学生さんみたい人が現われてなにかへんじゃないか、色メガネをかけてそれはへんじゃないかというような話はよくあるんですけど。しかしそれは僕が悪いんじゃなくて、僕のオヤジが悪いんです。考えてみますと、僕らの名前というか、僕らの年代というか、僕は昭和十六年生れですけども、この年代というのはだいたい軍治郎というのは一番典型的ですけれども、武だの勝利だの勝利だのですね、なんとなく守るだの攻める、攻めるなんていう名前はなかったかな(笑)。そういうような戦争に関係のある名前が非常に多いんです。男の名前はですねェ。僕なんかのばあいはその典型的な名前だったんですが。

僕がオヤジにどうしてこんな名前を付けたんだ、何だか長ったらしいし、僕の同じ年代にはこんな名前のはいないですからね、めったに。だからどうしてこんなの付けたんだと訊きますと、オヤ

ジはですね、初めこういうんですね。僕の出産予定日が十二月の八日だったんだそうですね。昭和十六年十二月八日というのは、これは真珠湾攻撃の日ですから、しかし、真珠湾攻撃の予定というのはまだ国民に知らされていませんから。ところが、まあ幸か不幸かですね、僕は予定日をはずれて四日後に生れたわけです。で、十二月十二日に生れたもんで、オヤジはその時はもう真珠湾攻撃を知らされていたわけですね。で、この際何か意義深い名前を付けようということでもって、お前は軍隊を治める男だということで付けられたわけです。

それから軍治郎でもですね、『次郎物語』のですね、次の次郎にしようかと、まあ、いろいろオヤジは迷ったそうなんですけども、意義深い名前というのはやっぱり意味がなけりゃだめだと、軍隊を治める明治の「治」でなければだめだということで、まあ軍治郎というふうに付けたんだそうです。

ところが、初めにその話を聞いたんじゃないんです。初めに訊いたときは、僕は物心付いてから訊きましたから、戦後になってからです訊いたのは。それで、その話の内容はどんなのかといいますと、軍治郎というのは軍隊を治める男じゃないんで、軍治郎というのは軍隊の「軍」ではなくて、「軍」だと、「軍」を治める男なんだ、というんですね。僕はそれを聞いたときは、なるほどなァと思ってましたけど、よくよく訊いてみると、軍隊を治める男に違いなかったわけです。それでですね、僕は最近自分の名前というのは、僕のオヤジが、はじめは軍隊を治める男といいながら、戦争が終って世の中がガラッと変わると、てのひらを返すように、「軍」を治める男に意義付けを変えた、これこそまさに戦後民主主義というものではないか、オヤジの中にもそういうのがあったのか、と、

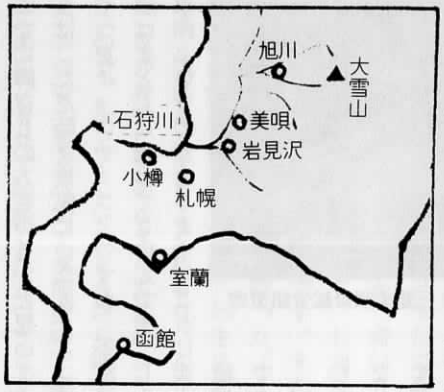
そんなふうに感じたりもしているわけです。で、僕の名前はそういう意味で非常に歴史的な名前だと思うんですが。

二　わが故郷・閉山の町

あのう、やはり僕もですね、昨日井出さんがやられたように、やはり自分の歴史と、それは僕も井出さんも同じだと思うんですが、色川さんも最近『ある昭和史―自分史の試み―』ということで書いてますが、これは自分史を語るというのは、自分の歴史の中にやはりひとつの普遍的な歴史というものを、自分という具体的な生きている自分というその中からとにかく何かを摑まなければ、広い世界へと広がってゆくものを摑まなければ、僕はやはり本物ではないんではないかと、僕自身が本当に考えるからなんです。ですから、僕は秩父事件のことを話しますけども、先程紹介ありましたけども、かならずしも秩父事件の幹部の一人である井上伝蔵とかですね、それから先程紹介があったように話が進むかどうかわかりません。ただ、「地下水」の流れがうまい具合に流れないで、そして表面だけでもって世の中が進んで来た。しかも、その表面だけで進んで来たんじゃなくて、そのために「地下水」というのは増々深い所に押し遺られてしまっている。だから流れ出そうとしても流れ出せない。そして深い所へ押し遺られていく。これはいったいなぜなんだろうか、ということですね。

今の時点から、現在の問題として考えていくとき、自分というものとの関わり、それから現代的な課題ですね、そのことの関わりの中でしか秩父事件というのは意味がなくなるであろうと、そういう意味で、僕はサブタイトルとして秩父事件の現代的意味について考えたわけです。まあ、僕は何分気の多い人間なもんですから、話が乗ってきますとあっちこっち飛んでいきまして、なかなか戻って来ないということがありますので、まあ、そこらへんを気をつけて聞いてください。

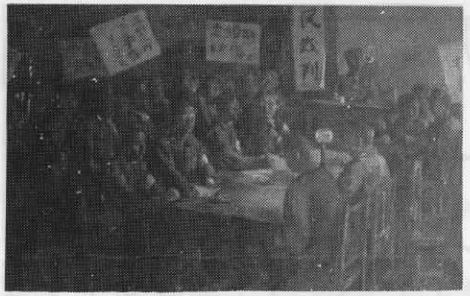
僕は大学を卒業したのは、一年浪人してますから、昭和四十年に卒業してます。その後五年程大学院にいきまして、そのまま学校に残って勤めて、三年半程いまして今の美唄の学校、専修大学北海道短期大学という大学に勤めるようになったんですが、ここは僕の生まれ故郷なんです。



Ⅱ－1

僕が生まれたのは、昭和十六年に北海道の美唄の炭鉱で生まれたんです。で、炭鉱で生まれて炭鉱で十年過しまして、その後オヤジがやめて町の方へ出て来ましたから、町の方でまた十年過ごしまして、大学に進んで札幌に出ましたからそこに十三年近くいたわけです。その後また美唄へ帰ったもんですから、自分が住んだ場所というのは生まれ故郷の美唄と札幌でしかないわけです。美唄というのは、

すでに御存じの方もいるかと思いますけども、もう閉山になってしまって全然炭鉱はありません、今は。ただ時々炭鉱にいた人がスコップとツルハシを持って、車で炭山へ行きまして露頭に出てるやつをチョコチョコとですね、不法に取り出してくるというようなことがたまにあるぐらいで、石炭はまともに掘ってないんです。しかしここで、終戦直後全国にさきがけて行なわれた「人民裁判」事件というのがあります。これは炭山の民衆が長年にわたる会社側の圧制に対して、三日間糾弾し続けて組合側の要求事項も合せて勝ち取るという事件だったわけです。そういう事件もあったわけです。



Ⅱ－2　人民裁判の絵（三菱美唄炭鉱労組美術サークル作成）

で、僕はなんとなく若そうに見えますが、先にもいったように、もう三十四歳に近くなってますから、それで結婚して十一年にもなってますから子供が三人いて、何となく学生さんみたいなんですが三児の父親なんです。それで僕の美唄での生活なり何なりは、今でも基本的に変りないものと考えてるんですが、生まれた時代と変りないものと考えてるわけです。

三　わが父母・流民の歴史

北海道というのは日本の縮図みたいなところで、というのは、

まだ和人が入って来てから本格的には百年ちょっとしか経っていない。で、入って来た人がほとんど全国からゴサゴサゴサっと入って来て、そしてでき上がっている。

ちなみに僕の家のことをいいますと、僕の父親というのは奄美諸島の徳之島という島の出身なんです。それから僕の母は京都の出身なんです。その二人が、どういうわけか東京で結婚しまして、そして東京で生活をしていたんです。

初めはですね、オヤジは島の農家の次男坊なんですね。で、農家の次男坊なもんですから生活が厳しくって、若い時分にどうしても生活がやっていけなくって、オヤジのばあいは家を飛び出しています。単身といいますか、若い人を二、三人連れて台湾へ行ってるんですね。台湾へ行って、そこで鉄道員になったりして、しかしそれも飽きたらしく、また帰りに島に寄って反物をドッさりかっぱらって東京へ来るんです。それを食い潰したあとで、しかたないから何か定職を持たなきゃいかんということで定職を持った。それが餅菓子の職人なんですね。

で、二人とも明治三十六年生まれなんですが、オフクロの方は京都のなにか絹の、西陣の関係かな、僕はあんまりよく知らないんですけども、そういうものの小さな問屋をしていたわけです。ところが非常に兄弟が多くて貧しかったものですから、とにかく生活していかなくてはならないというので、十三ぐらいのときから織子として奉公に出たりしてるんですね。それも芳しくないからというので、東京へ出て水商売の下働きなんかしていたわけです。そこへオヤジがチョクチョク通って来て、それで結婚したということらしいんですけども。

まあ、そのことだけを考えてもですね、まずひとつは、なぜオヤジが家を出なければいけなかったのか。それから、オフクロが奉公に出て、やがては京都の人間なのに東京に出なきゃいけなかったか。これは僕はせんじ詰めていくと、日本の近代の縮図ではないかと。つまり、今まで農家や小商人が何とか普通にやって行ける状態だったのが、それがやって行けなくなって、もっと簡単にいえば、資本主義が発展してきたことによって、そのことによって没落していったひとつの型だろうと思います。

その後ですね、それだけで済めばよかったんですけども、結婚して餅菓子屋をやったけれどもうまくいかない。子供も僕を抜かして三人ほどできるんです。餅菓子屋が駄目になって、やがてオヤジは遊びまわるし、オフクロはクズ屋をやる。クズ屋をやっても全然儲からない。まあ、クズ屋をやって儲かるわけもないんですけども。そればかりでなく借金もドンドン増えていく。家賃なんか二十ケ月分ためて、よくためさせてくれたと思うんですけども、二十ケ月分もたまった。いよいよ居づらくなって、しかたなく夜逃げしようということになったんです。けどどこへ夜逃げするか。ひょっとしてブラジルへでも行こうか、それとも北海道にしようか。オヤジがオフクロに相談したわけです。そしたらオフクロは、そんな遠いブラジルだけはやめてくれと泣いてせがんで、それじゃ北海道にジャガイモを作りに行こうと、うちのオヤジというのは大分調子のいい奴ですから、僕もその血を受けてるんですけども、結局ジャガイモ作りに行くということに決まったわけです。ところが実際に来てみたらですね、ジャガイモなんていいところで、結局普通の平野地帯からさらに谷底をずっと汽車で走って行って、そのドン詰りの山奥の山奥の炭鉱だったわけです。

四　開拓農民の実態

結局、何もない者にとっては、炭鉱坑夫募集に応じて生活を立てる道を考えるしかなかったわけです。だからこのとき二度目の没落をして、そして北海道へ来た。これは昭和十五年の初冬のことです。北海道はもうすぐ冬になります。ですからそれから一年して僕が生まれたんです。

けども、そういう僕の両親のことを考えますと、何といいますか結局のところですね、北海道に来た人はみんな同じなんです。

北海道は、よく開拓者だとか開拓者精神があるとかいろいろカッコいいことといわれます。だけれども、そんなフロンティア・スピリットだとか何とかいうのはなにも実体としてないのであって、なにも好き好んで北海道へ来たくて来た人は誰もいないんです、まず普通の人は。ですからそういう人達は、うちの両親らと同じように食い詰めてどう仕様もなくなって北海道へ来たんです。去るも地獄、残るも地獄という感じで、本州にいてもどうにもならない。かといって北海道へ来て何か道が開けるか。そうでもない。結局、最底のギリギリの炭鉱ぐらいなんです。

それでもっと前に入って来た、明治の時代に入って来た開拓者なんかもそうです。これは僕が調べた例ですと、愛知県から団体で入って来た人達がいるんです。これは愛知県の歴史を調べますと

すぐ分かるんですけど、その人達が入植したのは明治二十七年のことです。日清戦争の年です。

明治十七年をさかいに、愛知では農業人口がドンドン減っていくんです。それまでは農業人口が増えてたんです。それは何を意味してるのかといいますと、愛知県で急速に資本主義的な木綿工業が発展していくわけです。そのために農民が没落して、娘を女工にして出したり、自作農から小作農になったりということで、愛知県全体の人口は増えているんだけども農業人口というのが減っていくからなんです。そうこうしてる内に、十七年から三十三年までの間にですね、実に生産高が二十七倍にもなるほどの急速なピッチで、いわゆる〝東洋のマンチェスター〟といわれる工業地帯が作られていくわけです。そのときに農民は土地をカタに借金をしてそれも返せない。それで娘を売ると同様にして女工に出す。そんな状態が続くんです。

そんな明治二十四年に濃尾大地震が起ります。これは死者が七千二百人出ます。全壊家屋が十四万二千戸でしたか、そのくらい出ます。相当な被害だったわけです。関東大震災の方が規模が大きいですから後々まで知られるんですけども、その陰に、それ以前にこういう大地震があったんです。ちょうど尾張の地帯を襲ったために、その地域の農民が岐阜県の救済政策に対して、県庁にものすごい抗議を行ないます。なかば暴動的な。県庁は警察に訴えて、今でいうなら機動隊を呼んでですね、抜剣の警官隊がそれを鎮圧したという事件があります。

そういうことを経て、まったく泣きっ面に蜂のような状態で、愛知県の農民はなんとかしなけりゃならんというわけです。そしてその中のある有志が、それじゃ北海道へ行かないか、というんです

ね。その有志が、なぜそんなことを考えたかというと、当時政府が日本のさまざまな資本主義から起こって来た矛盾をなんとか解決するために、北海道へボンボン送り込んだんです。そういう政策をとったんです。ですから北海道への移住民の数を調べてみますと、明治二十四、五年から急速に増えるんです。桁が一段グンと上るんです。こういう増え方をしているというのは、そのあたりから日本の初期の資本主義の矛盾というのがあらわれてきて、それがドンドンと民衆を蝕んでいったわけなんです。で、そういうふうに蝕ばまれた民衆が、そこに天災がやってきてですね、その天災の救済もやってくれない、天災と人災が重なって、ひどい状態になって、残っていてもどうしようもない、しかし、政府がいってる、そこになんらかの望みがあるかもしれない、ほんの僅かの望みをかけて、そしてまた借金をしてですね、やっとこさ北海道へ入ってくるわけです。

しかし北海道に来たってまだ原始林もいいとこですからね。一番先きに道路を作らなければいけません。北海道の開拓で、開墾で一番最初に必要なのは道路なんです。進めないですから。しかしそれもほんの刈り分け道路です。でも道路を作るったってふた抱えもあるような木がいっぱいあるんですから。

今僕が住んでいるのは、農家の空家を借りて住んでるんですけど、僕の所から三キロばかり行った所

Ⅱ－3　原始のままに残された防風林

に最近排水溝から上げられた木があるんです。それは水の中に入っていたために全然形が変らないで、少しは腐ってますけどね、そういう木がたくさん上げられるんです。何かと聞いたら、これは開拓時代に切ったものをそのまま泥炭地の湿地帯に埋めたんだ、だから最近新しい排水溝にするために掘り上げたときに、こんなにいっぱい出てきたんだというんです。そういう跡がまざまざとありますし、開拓時代を忍ばせるように原始林そのまんまのですね、こんな太い木がいっぱいあります。

で、そういう木を切るのに愛知県の人は、まずジャングルみたいなところの木を切るのだからといって持って来たのが、せいぜい六十センチぐらいの、二尺ほどの鋸なんです。しかも幅が十センチぐらい、三寸ぐらいの鋸なんです。そんなのでこんな太いのが切れるわけがないんです。それに、北海道は熊笹が多いから「唐鍬がええなも」といって唐鍬を持って来たわけです。こんなチョコっとしたやつを。ところが北海道の熊笹でも木の根っ子でも、とてもじゃないけどどうにもならないわけです。そういうものが何もない。借金だけはあるけれども、何もないで来てるわけです。

その人達は石狩川の河口に入ったものですから、札幌に割と近かったので、札幌の金物屋に交渉しに行くわけです。だけど、金物屋に交渉しに行ったって、誰も、来てすぐのやつに貸してくれるわけがない。ですから来年の開墾した後の収穫払いでどうだ、といって団体民五十六軒（総勢三百二十人）が全員連判状を作って、全員ででかけて行って、なんとか鍬と開墾鎌と大きな鋸とを借りるわけです。自分達全員の責任ということで借りるわけです。

そしてやっと借りてきた鋸や鍬なんですけどね、それで一本切ったって倒れないんです。木が密

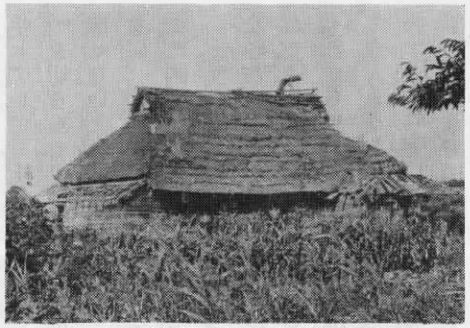
生していて、上の方で枝がビッと張ってますから。で、ちょっと倒れかかっている所の二本目のやつを切るんです。でもその木を切っても倒れない。こんな調子で五、六本切らないと一本の木さえ倒せないという状態なんです。倒した木がそこにあったら困るわけです。それを運ばなければならない。こまかく切って運ばなければならない。川がすぐ近ければ楽なんだけども、遠い所だと全然また困るわけです。

そういうことで何とかやっても、すぐ畑地になんかならないんです。結局、また越冬用の食糧がないということになって、越冬用の食糧を札幌の商人のところへ借りに行く。味噌・醤油、醤油なんて借りないです。味噌です。味噌を借りて来て味噌の諸味から醤油を作ってそれを使うんです。それから米ですね。あとは山菜でも何でも食える物は何でも食うんです。まあ、そういう生活をしてなんとかしのぐんですが、そのばあい、一人でなんか行動できないんです。自分の家の土地を開拓するからといって、自分の家の土地だけなんて絶対できませんから、これは。だから団体民全員で、働ける者は全員です。それで働いて協力し合ってやるわけです。そうしなければ開拓なんかできなかった。だからまして子供なんかほったらかされているだけです。

五　幻のフロンティア・スピリット

このあいだ亡くなりましたけど、八十六歳で亡くなりましたけど、お爺ちゃんがいるんです。そ

のお爺ちゃんが北海道に来たときには六歳ぐらいだったんですね。それで母親が恋しいんだけれど、開墾最中の親はかまってくれない。しかたないから遊びをひとりで覚えるわけです。そのお爺ちゃんは木登りが得意だったんです。お爺ちゃんの話しを聞くと非常に野性的な人で、朝めし腹いっぱい食うと晩めしまで全然食わなくても大丈夫だったというんです。朝食べるのが八時ごろで、晩食べるのは九時過ぎです。それでゴロンと寝ちゃう、そんなお爺ちゃんです。



Ⅱ－4　開拓農民の家（明治31年建造）

それから備中鍬ですか、刃が三本になっているんですけども、その刃の先が尖っていて野良仕事の最中によく踏むんです。それで足の上までぬけるんです。刺さって。で、医者なんかどこにもいないですからね、だから刺さった穴に泥を詰めて、そのまま仕事をしていたというんですね。そのうちに治ってしまったというんです。

そのお爺ちゃんは小さいころ木登りが得意ですから、本当に自由に木から木へ飛び移っていたんですね。ところがある日、目測を誤って落ちるわけです。落ちた所に木の切り株があったんですね、オヤジ達が切った。そこに腰をゴッツリぶっつけたわけです。で、ぶつけてしまって起き上がれない。僕らも経験ありますけどね、落ちたときに息もできないような状態。あれが続いて、さら

に這うようにして家に帰ったというんです。ところがオヤジにもオフクロにもそんなことといえないわけですよ。痛いなんて。痛いなんていうと、この忙しいときになにやってんだ、って叱られる。その方が恐ろしいわけです。オヤジに怒やされる方が。だから黙ってたというんですね。そして何年かするうちに痛みもなくなったらしい。

それでそのお爺ちゃんが八十の年に、どうも中腰になれないから、昔からなれなかったけども、このごろ特になれないからというので病院に行ったわけです。整形外科へ。そしたらレントゲンを撮ろうということになって撮ってみたら、骨が曲っているというんです。その曲り方というのが、一旦折れてヘンテコリンにくっついてそのまま曲ってるというんですね。だからお爺ちゃんに医者が聞くわけですよ。お爺ちゃん最近何か無理なことしなかったかい。何も覚えない、っていうんだね。したら十年前にないかい、というと、ない、と答える。二十年前は。ない。ずっといくわけです。ずっといってですね、七十年前にそういえば何かあったというんですね(笑)。七十年前に木から落ちて、ものすごく痛くってひどいことがあった、っていうわけです。それが放置されて、結局発見されたのは七十年後なんですよ。まあ、これは一例です。

ですから、こういうことがいっぱいあって、残るも地獄、北海道へ入って来ても地獄です。だから北海道の開拓者というのは、なにもフロンティア・スピリットを持って輝かしく北海道を開拓したとかなんとかじゃないんです。フロンティア・スピリットというのは、権力者がですね、資本主義の矛盾を解決するために北海道へ行って開拓しろと。それでロシアが南下してきたときにお前ら守

れと。それをやらせるために、人も誰も行かない蝦夷ケ島ですからね当時は。ですから、その蝦夷ケ島に行きたがらない人間をシャニムニ行かせるために、ちょうど戦争に行きたがらない人に大和魂だとか神風とかいったのと同じように、フロンティア・スピリットだフロンティア・スピリットだ、お前ら開拓者だ開拓者魂だ、こういってたわけですね。それでその実態を調べていけば、なんとそういうことなんです。

今のうちの息子らの小学校の副読本なんか見ますと、やっぱりきれい事に開拓者精神を書いてます。僕らの習った社会科の教科書の開拓の項目にも、やっぱり同じようにきれい事で書かれていたんです。だけれども、実際に調べてみるとそういうことだったんだ、ということが分かります。

六　抵抗の青年開拓者

まあ、話がちょっとそれましたけども、僕の父親と母親のばあいは農業移民でもありませんしね、炭鉱ですから。しかも家賃二十ケ月分踏み倒して来たっていうんですから。だからこれはまったく食い詰めて来た。ところがほとんどの人は自分の先祖の恥ずかしいことはいわないんです。カッコ悪いことはいわないんです。カッコのいいことだけいうんです。だから、お爺ちゃん昔厳しかったでしょ、お婆ちゃん苦しかったでしょ、といろいろな話をしても、いや、なんもだ、なんもだ。だけど仲良くなっていろいろな話を聞いていくとですね、いまみたいな話をぽつんぽつんとしてくれ

るわけですよ。ですからたいていの人はまず食い詰めて入って来た。本州・四国・九州で、食い詰めてどうしようもなくて入って来た。そういうところから北海道はできている。これで北海道の歴史を調べるとですね、そこの中にひとつの日本近代の縮図があるんではないだろうかということがだんだん見えてきたものですから、その後、僕は北海道の民衆精神史というものを続けたんです。

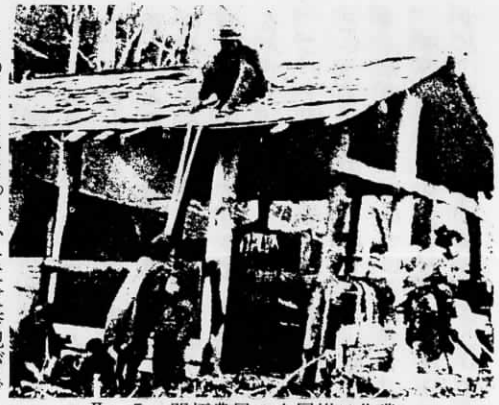
まあそれは別としてですね、例えば、北見に、まだ生きてると思うんですけども、一昨年九十歳で健在で、保険の外交員をやっていたお爺ちゃんがいるんですけど。そのお爺ちゃんのばあいはですね、やはり明治二十七年ですかね、埼玉県から移住したんですが、その時十三歳だったはずです。で、移住したのは、そのお爺ちゃんよりも四つ年上のお爺ちゃん（前記の兄）がいまして、このお爺ちゃんの方は六十何歳かで死んでます。それでこのお爺ちゃんのばあいは、満十四歳の時に自分の叔父さんが開拓に入ったというのを聞いて家出するわけです。家出して今の旭川ですね、北海道の真ん中にある旭川の近くに土地を借り受けて、十四歳ですよ、それで開墾してオヤジを呼び寄せるんです。

この十四歳の少年は新井宇太郎というんですけども、その宇太郎少年の弟さんが新井三之助さんといって、その九十歳まで、一昨年までは少くとも生きていた人なんですが、この弟の方のお爺ちゃんが自叙伝を書いているんです。

その自叙伝を見ますとやはり自分の先祖のことは悪くは書いてない。でもずっと類推していきますと、なぜ北海道に来たかについては、少しだけ店の方がおもわしくなかったというんです。それ

で父親も移住を決定したと。しかし移住を決定させた直接的な動機になっているのは、十四歳の息子が家出をして先に開拓者になっていたからでしょう。そして呼び寄せる形になってしまった。

ところが、明治三十一年に北海道にはじめての第七師団が設置されることになったんです。それまで北海道は屯田兵なんです。屯田兵というのは半分兵隊で半分農民ですからね。だから軍事訓練しながら農民やるわけです。けれどもロシアと日本の関係がおもわしくなくなって、満州方面での対立が激しくなり、日露戦争が近いころですから、これでは北海の防備も、北の防備も屯田兵だけでは足りんぞということになって設置されるんです。



Ⅱ－5　開拓農民の小屋掛け作業

そのときになって、軍事基地ができるというんで、せっかく開拓した土地を取り上げるということになった。ところが、とんでもない話だということになる。まあ、同じく開拓に入った人の大部分が泣き寝入りしていく中で、若干二十歳になったばかりの新井宇太郎一人が頑として抵抗するんです。

ここは俺らが入って来て開拓した所だ。俺たちは捨て難い故郷を捨てて、埼玉県の故郷を捨てて、

そしてやっとここに自分達の第二の故郷、自分たちの墳墓の地となる所を作ったんだと。だから、この土地は俺たちの新しい故郷なんだ、なんぼ金をたくさん出されても譲れるもんでない、そういって抵抗するわけです。そしたらまわりの連中はいろいろなことをいって宥めるわけですが、ぜんぜん聞かないんです。それが何回も続いて、しまいに条件闘争に変るんです。絶対譲れないけども、しかし公共性ということも考えて、日本の防備ということも考えれば、ということで、単純にそう考えて折れるわけです。しかしそうであるとすれば、土地をこんな安い値段で買い取るとはなにごとだ。ただでさえ売れない土地であるにもかかわらず、こんなに安い値段で買い取るというのは許せない。もっと高い値段に吊り上げろ、と二十歳の青年が要求するんです。最終的には全面的に負けちゃいます。しかし、それこそがむしろ本格的な開拓者精神といえるかもしれない。姿・形のカッコのいい大和魂みたいなフロンティア・スピリットは開拓者精神ではない。そういうことになります。

まあ、これもだいぶ話がそれちゃいましたけども。結局、秩父事件のことをだんだんといわなけりゃならないんですけども(笑)なんだか昨日の井出さんと同じようなことをいってるんですけども(笑)。それで途中ですね、はしょりながら頑張っていきます。